

# の士浪藩脱 気意心



小松弘明

日本売れる仕組みづくり一般財団 理事  
ソフトプレーン・サービス株式会社 会長・成長企業プロデューサー

この二年、僕の帰省に新たなスタイルが付け加わった。

高知龍馬空港に到着すると、空港からほど近い高知大学農学部のある物部キャンパスに直行する。高知大学で実施している「土佐フードビジネススクリエーター(FBC)人材創出」事業の講師として「営業マーケティング面からの人材育成」について講義するためだ。二〇〇八年から始めたこの事業は、高知の豊富で安心安全な食材をつかった付加価値の高い食品加工业(一・五次産業)の創出に向けたプログラムである。生産・加工・流通・販売を一貫してつなげる人材創出と、人材のネットワークづくりを大きな目的としており、すでに大きな成果(実際の流通に乗る商品化)が出ている。長い目でみれば、雇用創出という大きな目標も達成できると確信している。

僕は地方公務員の家庭で育ち、大学入学と同時に東京に出て、そのまま就職した。高知県の課題のひとつとして、高校卒業と同時に県外に出る若者が約五〇%、その大半が県外で就労することがあげられるが、僕も高知県の抱える課題を作った一人であると言える。幕末の「脱藩浪士」となれば変わらないうと、いろいろなセミナーでもしゃべっている(笑)。

就職・雇用に対する不安と都市型生活に対するあこがれがないままになつて故郷に残るという形になるのだ。しかし優れた情報や経済は都会に集中、特に東京一極集中になつているため、こうした問題は高知特有のものとは言えないだろう。高知の課題を解決することは、日本の課題を解決することに等しいのである。その点からも、FBC事業の意義は大きい。

グローバル化の進展、インターネットの発達による情報革命、高齢化社会の到来は、日本社会の価値観や経済状況を変化させている。これまでの大量生産・大量消費の時代は終焉をむかえ、地球環境にやさしいことが求められる時代が始まった。郷土高知を振り返ってみれば、自然豊かで、心豊か。人が人にやさしい土地である。「食」の面から見れば、生産量は少ないかもしれないが、高付加価値化できる食材の宝庫である。大袈裟で手前味噌に聞こえるかもしれないが、「土佐の時代」が来るといふ予感さえ湧いてくるのだ。時代にマッチし、県民がすこやかに暮らせるためには、高知を経済的にも活性化させる必要がある。「貧すれば鈍す」という言葉があるが、人に対する投資＝教育・人材育成ができ

ないと国は滅ぶ。経済的にも余裕がないと人材は育成しづらくなる。

中国「春秋時代」の書物の「管子」にはこう書かれている。

一年の計は穀を樹うるに如くはなし、十年の計は木を樹うるに如くはなし、終身の計は人を樹うるに如くはなし。

一年で国を發展させようとするならば穀物を作るのが手っ取り早い、十年で考えるならば木を植えなさい。住居にも燃料にも必要だから。でも未来を考え、継続的に計画するならば、人材を育成していくしかない、といった意味に解している。我が郷土土佐がこれからも心豊かな国でありつづけるためには、「人材育成」に力を注いでいかなければならない。僕も微力ながら高知出身者として貢献し続けていきたいと思っている。国許からお許しができるように……。

(こまつひろあき)

1991年高知県生まれ、1994年早稲田大学を卒業、三和銀行(現三井住友銀行)に入行。2000年ソフトバンクに入社、ビジネス開発のポストとして活躍。2005年日本経済新聞社に入社。2007年同社で「脱藩浪士」の連載を開始。脱藩浪士時代を基に多くの経営者への相談を受けるなど、創業プロデューサーとしての役割を担う。中小ベンチャー企業の経営者からの支持も高い。